なんだろう？ 下の箱のようなものは落ちてくるものを溜める器だけど、どんな使い方をしていたのかな。



浜田市金城民俗資料館・絲原記念館など

食

苦汁ふね（にがり）

解説

昔は、豆腐造りに必要なニガリを食塩から採っていました。ニガリを採るために丸木をくり貫き苦汁採り船を作り、その上に食塩を入れた塩籠を置きます。長期間放置しておくと食塩からニガリがしたたり落ちニガリ船にニガリが溜まります。

うつりかわり

現在の姿

「苦汁ふね」は、昭和20年になると既製品のニガリが簡単に入手できたことと、個人の家で一度に大量に豆腐を造ることをしなくなったのでこの「苦汁ふね」は全く使用されなくなりました。

苦汁を採る道具



使われた年代：昭和10年代

使用した人々：農家の人々



とくちょう

豆腐を製造する時に使用するニガリを採る道具です。

むかししまね資料館

なんだろう？ 石の底面には溝が刻まれているようだけど、どうなっているのかな。



飯南町民俗資料館・浜田市金城民俗資料館など

食

石臼（うす）

解説

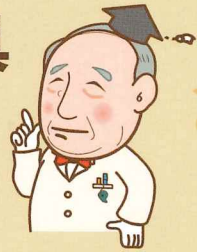
一般に穀物（こくもつ）を粉にするのに使用されました。豆腐（とうふ）にする大豆（だいず）を挽（ひ）いたり、米を挽いて団子の粉や餅とり粉にしました。二つの円筒形の石の接触面に歯がつけてあり、上の臼の穴から穀物を入れながら上の臼を回転させると穀物がすりつぶされます。上の臼には木製の取手をつけてまわします。石臼が大きい場合には取手にT字状の補助木をつけ、これを天井から紐（ひも）でつるして二人向かい合って石臼をまわすこともありました。

うつりかわり

現在の姿

製粉機の登場により急速にその姿を消しました。豆腐やきな粉、さんどの粉などは食料品店で購入するようになったため、家庭で石臼を使用する必要がなくなったからです。現在ではそばやお茶を挽く際に石臼を使用することがあります。

食品をひいて粉にする道具



使われた年代：～現在まで

使用した人々：一般の人



とくちょう

上の石を回転させることによって食品がすりつぶされます。

なんだろう？

箱の横と下から水が落ちるようになっているけど、何だろう。



食

浜田市金城民俗資料館・飯南町民俗資料館・
邑南町郷土館など

豆腐製造機（とうふせいぞうき）

解説

昔から農家は各家庭で自家製の豆腐を製造していました。大豆を一晩水に浸（ひた）してから石臼で挽き潰（つぶ）すと大豆の醐汁（ごじる）ができます。箱の内側に麻（あさ）で編んだ豆腐袋を敷いて豆腐の醐とニガリを混ぜ合わせて入れ、蓋（ふた）をして水を絞り固（しぼ）め方（かた）と出来上がります。10丁用と16丁用があります。豆腐の原料である大豆は、田んぼの畦（あぜ）で育て自家製の豆腐を作っていました。

うつりかわり

現在の姿

一度に製造できるものに10丁用の豆腐製造機があったが、16丁用のより多く造られる大型のものに変遷したほかは変化はありません。昭和30年頃からは豆腐造りの専門店ができました。

豆腐を造る道具



使われた年代：昭和30年代

使用した人々：農家の人々



左：10丁用　右：16丁用

とくちょう

昔は各家庭に一つはあった豆腐を造る道具です。

なんだろう？ 羽釜（鍋の一種）の上に置いて使うんだよ。何だろう。



食

日原町歴史民俗資料館・飯南町民俗資料館・
邑南町郷土館・浜田郷土資料館など

せいろう

解説

せいろうは木製で、板で作った四角いものと、桶式に竹の輪をかけた丸いものとの二種類があります。普通は一段、または二段重ねで使いますが、三段重ねの場合もありました。竈にかけた羽釜に水を入れ、縁に稲藁製のシブタという密閉具を置き、その上にのせて蓋をし、蒸しました。蒸すものは主にもち米でしたが、粟や黍などもこれで蒸して餅にしました。また、サツマイモやカシワモチを蒸したり、米麹用の米なども蒸しました。

うつりかわり

現在の姿

昭和30年代頃から、丸いアルミ製のせいろうが普及しました。続いて、電気蒸し器が出まわり、電気餅つき機も使われるようになりました。現在は、蒸す・つくの両機能を備えた電気餅つき機が使われるのが一般的となりました。

もち米などを蒸す道具



使われた年代：始まり不明～1960年頃まで

使用した人々：台所をあずかる主婦



とくちょう

蒸し器、食品に加工する穀類を蒸す道具です。

なんだろう？ 上と下に栓が付いていて、なにかを入れていたようだね。

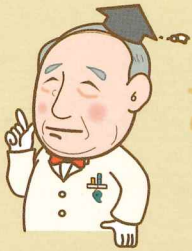


食

樽（たる）

飯南町民俗資料館・邑南町郷土館など

酒や醤油を入れておくもの



使われた年代：1950年代頃まで

使用した人々：一般の人

解説

酒・醤油（しょうゆ）・焼酎（しょうちゅう）などを入れて運搬したものです。下部の栓を抜けば中身が出る仕組みになっています。酒などはこの樽ごと購入し、家庭に置いて使い、中身がなくなると酒屋に返し、新しいものを購入しました。樽の材料には杉を使います。特に酒には杉の香りがつき、よいとされます。中でも杉の木の中心部にある「赤身」で作られた樽は、最高級とされました。香りが強いうえに、酒にほんのり赤みが移り好まれました。また、漬物や海産物を運搬する際にも、樽が用いられていました。



とくちょう

酒などの液体を保存することができます。

うつりかわり

現在の姿

家庭用・運搬用とも樽を使う光景はほとんど見られなくなりました。ガラス製の一升瓶やプラスチック製の容器がこれに取って代わっています。現在では、婚礼などの慶事（けいじ）に使われる角樽（つのだる）や鏡開きなどで樽を見ることができます。

なんだろう？ 植木屋さんの使う大きなはさみに似ているね。何だろう。



住

日原町歴史民俗資料館・飯南町民俗資料館・
邑南町郷土館・安来市立歴史資料館・
浜田市金城民俗資料館など

屋根ばさみ

解説

屋根ばさみは、草屋根を葺(ふ)くときの最後の仕上げ道具です。葺き終わった屋根を、上部から葺き草の切っ先をこのはさみで切り揃え、そこをヘラ（ハバイタ）で叩いて整形しながら屋根コグチまで下がります。さらに、屋根コグチも入念に切り揃えてヘラで仕上げます。この仕事は、草屋根の表面を奇麗(きれい)にして見た目を良くするだけでなく、葺き草を切り揃えることにより雨水の流れを良くして屋根を湿気から護(まも)り、耐用年数を長くするという、大切な役目をもちます。

うつりかわり

現在の姿

屋根ばさみは、屋根職人だけでなく、多くの農家にありました。屋根の一部が腐ったり、大風で壊れたりしたときなど、職人に頼まず、自分で葺き草を差替え、はさみで切って修理しました。近年、草葺き屋根をみることは稀(まれ)になり、屋根ばさみを手にする機会はなくなりましたが、屋根葺の技術を引き継ぐ職人たちには欠かせない道具です。

茅葺き屋根の茅を切り揃える鋏(はさみ)



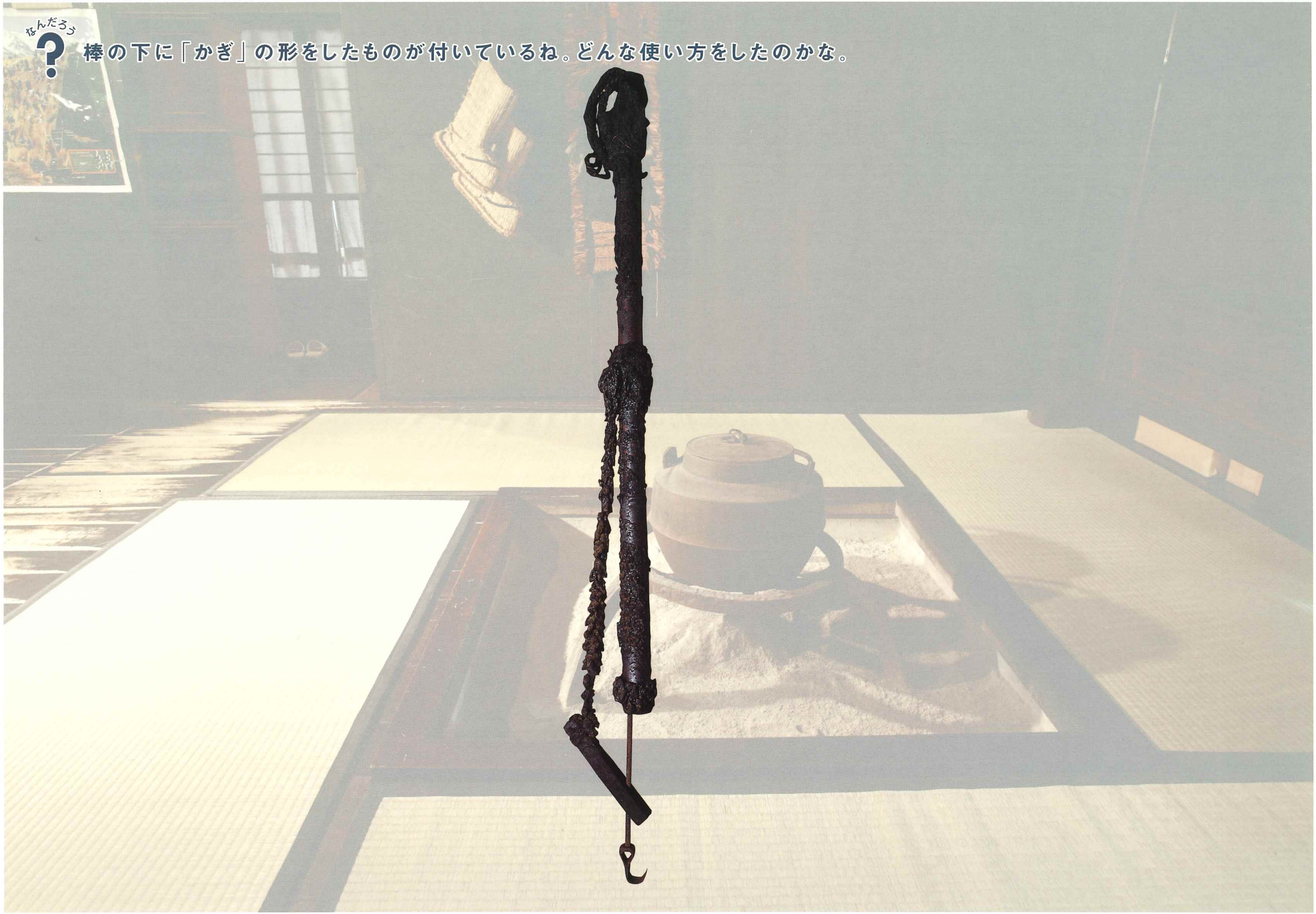
使われた年代　～現在まで

使用した人々　屋根葺職人



とくちょう

屋根を葺くときの最後の仕上げ道具です。機能的な違いがわかるといいですね。


なんだろう？
棒の下に「かぎ」の形をしたものが付いているね。どんな使い方をしたのかな。

住

浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・絲原記念館など

自在鉤（じざいかぎ）

解説

この「自在鉤」は、吊（つ）るした道具の高さが上・下自由に調整できる道具です。昔は農家の囲炉裏（いろり）には必ず一つはある道具で、自在鉤のサヤが竹製、木製、鉄製ものと種類も豊富にあります。

うつりかわり

現在の姿

「自在鉤」は、茅葺（かやぶ）き農家の「いろり端」で使用していましたが、瓦葺き屋根に屋根替えをした時点で消滅していきました。

むかししまね資料館

囲炉裏で鍋など吊るす道具



使われた年代：昭和30年代頃まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

囲炉裏の真ん中に天棚（たな）から「自在鉤」を吊るし、鍋、茶釜、やかん等を掛けます。

ねんだろう？ 寝相（ねそう）が良くないと、ずれ落ちてしまうこれは何だろう。



住

浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
松江郷土館・飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・
絲原記念館・平田本陣記念など

箱まくら

解説

箱まくらは、本体の木製部分と、上部の枕部分が合体(がったい)したものです。

うつりかわり

現在の姿

「箱まくら」は、昭和20年頃から「茣蓙(ござ)まくら」や「蕎麦殻(そばがら)まくら」に替わっていきました。現在はウレタン製の低反発枕などがあります。

まくら

使われた年代：昭和20年代まで

使用した人々：女性の人々



とくちょう

昔、婦人はマゲを結(ゆ)った髪がくずれないように箱まくらを使用していました。

なんだろう？

紙（和紙）を何枚も貼り合わせたものだけど、何だろう。



浜田市金城民俗資料館・絲原記念館など

住

渋紙（しぶがみ）

解説

大きいものは部屋の六畳（じょう）の上敷（うわじ）きとしても使いました。また、穀類（こくるい）の天日干（てんぴぼ）しなどにも使われました。小さいものでは、石臼（うす）で粉を挽（ひ）くときの敷物（しきもの）としても使用していました。

うつりかわり

現在の姿

「渋紙」は、多用途の敷物でしたが、屋内で使用するものとして、上敷き用茣蓙（ござ）、そして化学製品などの「カーペット」に替わっていきました。屋外（おくがい）作業用としては、「ビニールシート」に替わりました。

敷物

使われた年代：昭和10年代まで

使用した人々：農家の人々





とくちょう

和紙を柿の渋で何十枚も張り合わせて作った敷物です。畳の上敷き、石臼の敷物などに使いました。

なんだろう？ 現在はプラスチック製になっていて、把手（とって）を持って運ぶこの道具は何だろう。



浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館など

住

火番たご（ひばん）

解説

いざ火災という時に、この「火番たご」を用いて消火にあたりました。玄関口に面した屋根裏の鴨居（かもい）に平行して竹を吊り、火番たごを逆さに数十個一列に吊るして非常時にそなえました。旧家などでは数多く吊るしてありました。

うつりかわり

現在の姿

「火番たご」から「ブリキ製バケツ」に、そして「プラスチックバケツ」へと替わりました。

むかししまね資料館

防火用バケツ



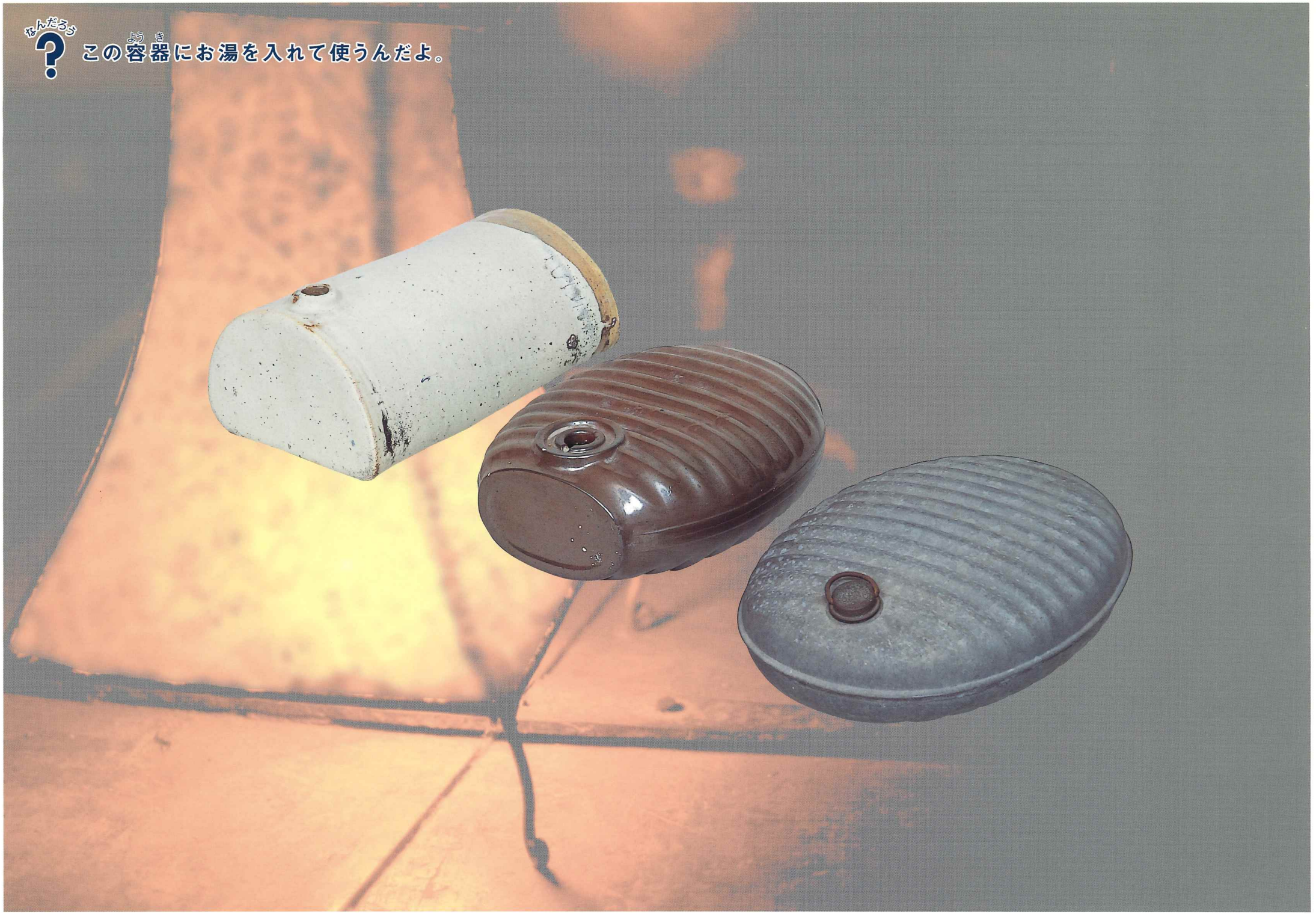
使われた年代：昭和10年代まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

竹籠に和紙を貼り、柿渋を塗り丈夫に仕上げてあります。火災時に水手桶（ておけ）として使用しました。


なんだろう？
この容器にお湯を入れて使うんだよ。

住

益田市立歴史民俗資料館・絲原記念館・
浜田郷土資料館・邑南町郷土館・松江郷土館・
日原町歴史民俗資料館・浜田市金城民俗資料館など

湯たんぽ

解説

古くは石を囲炉裏(いろり)の熱灰で焼いたあと、布きれに包(つつ)んで使っていました。それを行火石(あんかいし)と呼んでいました。湯たんぽは、江戸時代に中国から伝わったと言われています。タンポは唐音で、中国音の転用との説もありますが、柳田国男は、タンポは器を叩(うつわたた)いた時の音の連想と言っています。

[柳田国男「方言と昔」(『柳田国男全集』22所収、1990)より]

うつりかわり

現在の姿

明治～昭和30年頃までは、どの家庭でも使われていましたが、現在では使われていません。今日では、電気アンカや電気毛布にその役目は取って代わられました。

ふとんに入れて体を温める道具



使われた年代 ～1960年頃まで

使用した人々 一般の人



1・2―全部湯たんぽ　1―左から古い順　陶製・陶製(波形)・ブリキ製



とくちょう

焼き物の容器に湯を入れて、布で包んでふとんに入れて体を温める道具です。

なんだろう？

寒い冬に大活躍（だいかつやく）。ふとんをかけて使うんだよ。



住

益田市立歴史民俗資料館・鹿島歴史民俗資料館・
平田本陣記念館・飯南町民俗資料館・玉作資料館・
浜田郷土資料館・絲原記念館・日原町歴史民俗資料館・
邑南町郷土館・松江郷土館・浜田市金城民俗資料館など

ねこごたつ

解説

置きごたつの一種で、土製の外枠(そとわく)の中に土製の火容(ひいれ)を入れて、上から布団(ふとん)をかけて手足を温める道具です。普通のこたつよりも小形で、どこにでも置かれる便利さがあります。外枠の上部はなだらかな丸味のある箱形のもので、周囲の壁三方には穴があり、他の一方は火容の出し入れ口になっています。天井は二段になって布団に伝わる熱を緩和(かんわ)しています。

うつりかわり

現在の姿

ねこごたつの由来(ゆらい)は、布団をかけた形が猫がうずくまっているようだからとも、猫を抱えているような形になるからだとも言われています。今日では、電気アンカにその役目は取って代わられました。

炭火を利用して体を温める道具



使われた年代：1910年～1950年頃まで

使用した人々：一般の人



とくちょう

土焼きの外枠の中に行火(あんか)（土焼きの火容(ひいれ)）を置き、上からふとんをかけて手足を温めます。

なんだろう？

「やぐら」は何のためについているのだろう。火の用心！





住

益田市立歴史民俗資料館・飯南町民族資料館・
絲原記念館・浜田郷土資料館・邑南町郷土館・
松江郷土館・日原町歴史民俗資料館など

置きごたつとやぐら

解説

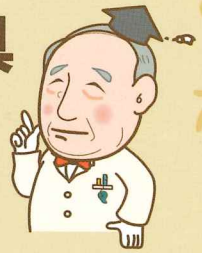
床に炉を設け、上に「やぐら」を置き、ふとんをかけて熱の放射を防ぎ暖をとるようにした効率の良い保温具をこたつと言います。これは、簡単に行火を置き、移動が自由になる置きごたつです。熱源は煮炊きに使った竈やクド、囲炉裏の燠を使ったり、火持ちがよく、値段も比較的安い炭団、豆炭、練炭もつかっていました。

うつりかわり

現在の姿

室町時代に広まり、江戸時代以降急速に普及しました。堀ごたつと置きごたつがあります。今日では熱源は便利な電気ごたつに替わってきました。また、椅子のように腰かけられる腰かけこたつも普及し始めています。

炭火を利用して体を温める道具



使われた年代：～1960年頃まで

使用した人々：一般の人



とくちょう

行火（土製の火容）を入れ、上にやぐらを置き、ふとんをかけて手足を温めます。

なんだろう？ かごのようだね。編(あ)んで作られているけど、材料は何だろうね。



日原町歴史民俗資料館など

山仕事

かんば

解説

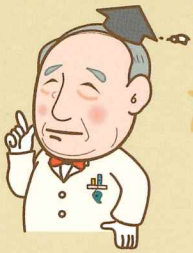
桜の木の皮とノブの木の皮で編んだ背負籠で、木挽き職人がこれに山道具を入れて背負い、山へ上がって行きました。大きさは、縦、横ともに40cm、幅12.3cmで、木の皮製とはいえ頑丈に仕上がっています。この他に「いぐり」という山行きの袋があります。「いぐり」はシュロ製で、横長の背負袋ですが、手で提げたり、木の枝などに掛けたりもできるように編んだものもあり、作りは入念にされています。

うつりかわり

現在の姿

木挽きという職業は、ごく限られた人達の専門職で、この道具を一般家庭で目にすることはありませんでした。昭和10年頃から、石油発動機を動力源とした移動製材所が山奥に入るようになり、木挽きの仕事は急激に減りました。それでもまだ昭和20年代には、木挽きが山で小規模の建築材や鉄道の枕木などを削ったりするのを見ることができました。

山行きの背負い籠



使われた年代：～1930年代頃まで

使用した人々：木挽き職人



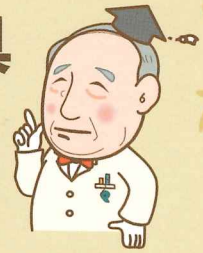
とくちょう

木挽きが小道具を入れて山へ背負って行くカゴです。

なんだろう？ いろいろな道具とそれを入れる袋だよ。どこへ持っていって使ったのかな。



山で仕事をするための道具



使われた年代 1940年頃まで

使用した人々 山で仕事をする人々



とくちょう 山での木挽き、木出し道具を持って仕事に行きました。

飯南町民俗資料館・邑南町郷土館など

山仕事

山行き道具

解説

木挽(こび)きや木出しをするためには、のこ・なた・まさかり・つまごわらじ・はばき・連尺(れんじゃく)・てかんなどさまざまな道具が必要でした。写真左は、藁(わら)で編んだ山行き道具入れという袋で、背負ったり手に提(さ)げたりしたものです。中には、山仕事で使う諸道具を入れました。木出しの際には、木に「てかん」と呼ばれる金属の環(わ)(写真)を打ち込み、連尺(肩にあたる部分は、綱が食い込まないように幅広く作られている:写真)をつないで、人力で運び出しました。

うつりかわり

現在の姿

鋸(のこぎり)で木を切り倒し、木馬(きんま)で運び出していた頃に使われた山行き道具は、伐採(ばっさい)機械の発達と架線(かせん)による木材の搬出(はんしゅつ)が主になった今では、ほとんど見ることができなくなりました。

なんだろう？

林業にたずさわる人々にとっては今も欠かせない道具のひとつだよ。



山仕事

飯南町民俗資料館・絲原記念館・邑南町郷土館・
日原町歴史民俗資料館など

まさかり

解説

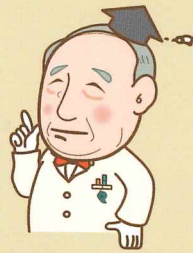
切り倒された原木を割ったり、横木を切断、また木の皮をはいだりするときに使用されました。普通、斧（おの）と言ったり、斧の大型のものを「まさかり」と言ったりします。「まさかり」にも、使用目的によっていろいろな種類がありました。

うつりかわり

現在の姿

動力機械の普及により、使用頻度（ひんど）は減っていますが、山に暮らす人々にとっては、なくてはならない道具であることは、昔のままです。

木を切る道具



使われた年代：～現在

使用した人々：一般の人や山仕事の人々



とくちょう

木に打ちこむことで切ったり割ったりできます。

なんだろう？

一般的な鋸（のこぎり）とは形や大きさが違うようだけど、なにを切っていたのかな。



山仕事

飯南町民俗資料館・絲原記念館・浜田郷土資料館・
安来市立歴史資料館・日原町歴史民俗資料館・
邑南町郷土館・松江郷土館・浜田市金城民俗資料館など

のこ

解説

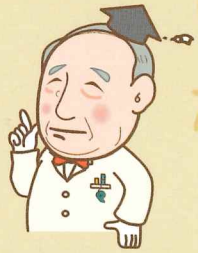
山で原木を切り倒して運び出せるような大きさに分割したり、太い枝などを切断するための鋸(のこ)です。写真上は、「板ひき鋸」とか「大ひき鋸」といって、木材の繊維に平行に切断する縦挽(たてび)きで、製材用鋸です。刃と柄の角度が深くとってあるのが特徴です。写真下は、横ひき鋸で、生木(なまぎ)を切ったときの目詰まりを防ぎ、切り粉を排出(はいしゅつ)しやすいように刃の形が工夫されています。

うつりかわり

現在の姿

チェンソーや製材をおこなう機械の発達と普及により、鋸による立木の伐採や製材は、ほとんどみられなくなりました。

木を切る道具



使われた年代 1940年代まで

使用した人々 木挽きを生業とする人々



とくちょう

木にあて引くことにより木を切ることができます。


なんだろう？
はしごのようだけど、幅の広い背負い紐（ひも）が付いているね。どうやって使うのかな。

飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・
浜田郷土資料館・日原町歴史民俗資料館など

山仕事

きおいこ

解説

梯子(はしご)状になった部分に荷物を乗せる足が2本取り付けてあります。荷物を乗せる足と梯子の縦木(たてぎ)の部分が一本の木でできているものもありました。木の幹(みき)と枝の太さや角度が適当なものを選び、真ん中から割って作りました。木おいこには薪(まき)や炭焼き用の材木の運搬のほか稲(いね)・藁(わら)・笹(ささ)なども運びました。直接背中にあたる部分には藁で作った背あて(せなこうち・せなかち)を緩衝(かんしょうざい)材として使用していました。写真右は子ども用の木おいこです。

うつりかわり

現在の姿

写真の木おいこのほか、梯子の下の端を少し余して荷物を乗せる足を取り付けた木おいこもあり、荷を背負ったまま小休止するのに支えとなり便利だったといいます。現在は運搬車などによって運搬されることがほとんどですが、人力に頼らざるを得ない状況では骨組みが軽量な金属でできたおいこを使用することもあります。

木などを背負うための道具



使われた年代 (主に)1970年代頃まで

使用した人々 一般の人





とくちょう

薪(たきぎ)などの木のほか稲、藁など束(たば)ねたものの運搬に向いています。

なんだろう？

細長い座ぶとんのようだけど紐が付いているね。何だろう。



山仕事

浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館・
浜田郷土資料館・安来市立歴史資料館・
松江郷土館・飯南町民俗資料館など

背こうち（せなこうち）

解説

背中に「背こうち」を背負（せお）って、その上に荷物を乗せて運ぶ用具です。材料は全て藁（わら）です。「背こうち」の厚みのあるものは重たいものを運ぶ時に使用しました。重たい物から順番に書くと、四八（しはち）（まくら木）、割木（わりき）、刈り草、干草（ほしくさ）などです。

うつりかわり

現在の姿

「背こうち」は多種類ありますが、「荷台（にだい）」の登場により次第に消滅していきました。

背に荷物を背負う時に体との間に当てるクッション



使われた年代：昭和20年代まで

使用した人々：農家の人や山仕事の人々





とくちょう

山から荷物を運搬する用具です。

なんだろう？

袋かな。それとも籠（かご）かな。少しゴワゴワした感じだね。何だろう。



浜田市金城民俗資料館・飯南町民俗資料館・
邑南町郷土館など

山仕事

こしご

解説

「こしご」の材料は藁で、藁を綯って編みあげたものです。使用目的に合わせて大きさが変わるので、種類が豊富にあります。

うつりかわり

現在の姿

「こしご」は大変種類と用途の多い入れ物ですが、化学の発達により、プラスティック製品の「買い物カゴ」などに替わりました。

藁製の編み籠

使われた年代：昭和20年代まで

使用した人々：山仕事の人々







とくちょう

藁製品の籠です。弁当入れ、道具入れ、ワラビ採りようなど用途に多種類あります。

むかししまね資料館